



## 開催報告

2019

REPORT

それからの動物園 武田 俊

はじめは、正門からだった。いつも、誰かに手を引かれていた。そのうち、妹が加わった。スクランブル交差点の信号が青になると、「とおりやんせ」が流れた。園内は広くて、すべてはまだ回れなかった。休憩所のテーブルチェアはいつもいっぱい、ぼくたちはビニールシートを敷いて、母手製のおいなりさんを食べた。

まわりにはそんな家族たちが、たくさんいた。今よりも人の暮らしぶりが均質で、同じような週末を過ごすことの幸せがあった。知らない子のお父さんがうれしそうにビールを飲んでいて、ぼくもうれしい。帰りはいつも、世界が終わるようなまっかな夕焼け。それがおそろしく、かなしくなったりする。

「……そろそろいいよな。」

「うん、もうお母さん、車に乗ったと思うぜ」

そうやって、お菓子とナイフをつめたナップサックを背負った。園の裏山に住むSくんの家で遊ぶ日は、山の尾根をつたってこっそり入園としげ込む。必要もない

のに小枝をナイフではらって進み、語尾に「だぜ」をつけて話す。

ブナの木立ちの中、三つ切り株がならぶ場所で「コアラのマーチを食入る。急に「好きなひといる？」ときかれる。いねーよ、と答えるとき、これがあんなに急いで、と誇らしく思う。同時に少しだけ、一年生の頃から気になっている女の子の顔を思い浮かべた。

それからの動物園を知らなかった。ボートに乗ったら別れるというシンクスも、知らないまま東京に出た。最初の夏に、高校からつきあっていた彼女と別れた。シンクスだったらよかったのに、人はふつうに別れる。

久々に出かけた時は、足元の小さな人の気配がたまりだった。「はいにい、そうさんみよ」といって駆けていくめいっ子の手を引く。ビニールシートを敷いている人が、いない。テーブルチェアが新しい。変わるものと、変わらない時間がある。「ここがそれからの動物園だ。帰り道、世界はまだ終わらないから、夕焼けをそぼくさされいだと感じる。」

コトノハなごや

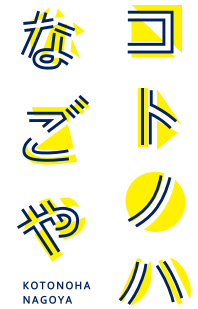
検索



kotonohanagoya.jp

この印刷物は古紙パルプを含む再生紙を使用しています。

## 開催報告



## はじめに

文芸による名古屋の魅力発信事業

第3回「コトノハなごや2019」レポートをお届けします。

日常の何気ない名古屋の風景写真をもとに、

今回もたくさんの皆さんが、名古屋の魅力を見つけて

コトノハ作品を作ってくれました。

ありがとうございました。

今これを読むあなたが感じている名古屋と、

重ねて感じてみてください。

また、今回初開催した写真展とワークショップ風景も掲載しています。

## もくじ

- 2 第3回作品募集プログラム写真
- 5 入賞作品
- 10 入選作品
- 25 実施レポート



1

### 東山総合公園

東山動植物園、東山スカイタワーのある広大なエリア。東山ポートハウスはリニューアルでおしゃれになりました。



2

### 名古屋市交通局バス

名古屋の街中を走る基幹バスは、地下鉄のダイヤ間隔と同じくらい本数があり、ちょっと待てばスグ乗れるのが魅力です。



3

### 名古屋港シートレインランド

遠くからでも見える観覧車が目印のシートレインランド。夜のメリーゴーランドを感慨深く見たい大人の方！入園料は無料です。（アトラクションごとに利用料金が必要です）



4

### 旧東海道有松の街なみ

毎年10月第1日曜日に行われる有松天満社の秋季大祭「有松山車まつり」。絞りの文化体験ができ、通りがゆかた姿の人々にぎわう「有松絞りまつり」は毎年6月に開催されます。



5

### オアシス21と名古屋テレビ塔

ライトアップされた水の宇宙船と名古屋テレビ塔。これらをバックに自撮りしたり、観光記念のフォトスポットにと、最近では外国の方からも人気が高まっています。



### 中村 航

KOU NAKAMURA

「文化が生まれる」

身近な写真をもとに、短い文章で世界、あるいは自分を表現する。コトノハなごやのコンテストは、今までありそうでなかった有意義な試みで、初回から楽しく選考委員をやらせてもらっている。そのコンテストも3回目となったのだが、毎回のレベルの上昇は特筆すべきものだと思う。自由で、鮮やかで、深い。今回は特に魅力的な作品が多くて、選に漏れた作品に関しても、他作品との比較のなかで、断腸の思いで落とした、という感じだった。お世辞は抜きに、新しい文化の萌芽を感じている。入選作品、みんなに読んでみてほしいです！



### 吉川トリコ

TORIKO YOSHIKAWA

現代性と多様性。2019年だからこそ書かれたのであろう作品ばかりで、それぞれ作者の息遣いが伝わってくるようだった。息苦しい日常からの解放を書いた作品や、積極的に読者をさらっていかうとするたくらみに満ちた作品など、テーマ性の高さ、技巧の高さにも唸らされた。800字でどこまでも高く遠くまで飛ぼうとする人もいれば、飛ばずに地べたで寝転がる人もいるし、お弁当を広げてピクニックをはじめる人もいれば、音楽を奏で踊りはじめる人もいた。にぎやかで楽しい選考だった。



### 武田 俊

SHUN TAKEDA

3年目を迎えた今回、審査員のひとりとして初めて基調文の執筆を担当しました。800字の中に思いと風景を閉じ込めることの難しさと歎び。ひとりの書き手として投稿者の皆さんと同じ体験した後に行う審査は、背筋が伸びました。特に驚いたのは、全体を通してクオリティが著しく上がったこと。どの作品にもきらめきがあり、うれしい悲鳴とはこのことかと感慨深い審査になりました。編集者としては、よい作品が出版につながるという、など次年度以降へのアイデアや期待も尽きない、そんな時間になりました。



やま  
とみ  
やよ  
い

行き先は  
星々の  
世界

岐阜市に住む小学6年生の神保加奈は、密かなおしゃれをして学校に通っていた。名古屋で一人暮らしをしている8歳上の姉の美奈がピアスをしているのに憧れ、虹色に輝く星型のシールを耳たぶに貼り、髪の毛で隠して登校していたのだ。

ところが、クラスのボスである藤堂さんに見つかってしまった。藤堂さんに「それ、ピアスのつもりな感じ?」とニヤニヤされ、加奈は真っ赤になった。しどろもどろになり、震える手でシールを剥がした。それ以来、加奈は藤堂さんグループの良いオモチャとなった。

何があろうと両親の前ではいつも通りに振る舞っていた加奈だが、姉には「学校むり」と短いラインを送った。美奈は土曜日になると岐阜に戻ってきて加奈を名古屋に連れ出し、アパートに泊め、何時間でも話を聞いてやった。そして日曜日には二人でバスに乗り、どこに行こうか何食べようかと盛り上がりながら、名古屋の街のあちこちに出かけるのだった。

中でも加奈は栄が大好きだった。三越とラシックと松坂屋とパルコが立ち並ぶ大津通は、歩いているだけでわくわくする。そして何より、ここに来るとぶっ飛んだ格好の人に必ず遭遇するのがいい。全身をショッキングピンク色でコーディネートしている若いお母さん。高級ブランドのロゴをパッチワークしたTシャツを着る小学生。全ての指に金の指輪を嵌めているおじさん。正直言ってセンスがよく分からないけど、自分の「素敵」を貫こうとする揺るぎなさはガンガンに伝わってくる。強い。名古屋強い。私もこうだったらな。加奈は思う。貫いて貫いて、そしたら無残に砕かれた心のかげらだって拾い上げて、バットで宇宙にかっ飛ばし、空に輝く星にするんだ。

また平日の朝が来た。どんよりと曇る空の下、とぼとぼと通学路を歩きながら、加奈の心は家を離れ、学校を離れ、岐阜を離れ、名古屋に飛んでいた。栄へ。栄へ。バスに乗って、栄へ。世界を与えてくれる、栄へ。





き  
な  
こ  
ご  
は  
ん

## 頑 張 れ よ

エレベーターは、展望台に向かって上昇を始めた。  
私の隣には、遅しい<sup>たくま</sup>身体をびしりとしたダークスーツに包んだ彼。  
でも、彼が誰なのか、何故私とここにいるのか、どうしても思い出せない。思い出せるのは――。

「見せたいものがあるんだ」

そう言った彼の、まなざしだけ。  
ちらりと横目で見上げると、彼は、彫の深い顔に真剣な表情を浮かべ、じっと外を見つめていた。私は視線を逸そらし、遠ざかりゆく地上の世界を見下ろす。三か月間、毎日のように通い詰めた動物園。上司のセクハラに耐えかねて会社を辞めてからの、私の、唯一の居場所。

エレベーターが止まった。扉が開く。踏み出した途端、目に飛び込んできた景色に、私は息をのんだ。

視界の端から端まで、見渡す限り広がる世界。上半分は、擦れるような白い雲を浮かべた水色の空。下半分は、凹凸<sup>おうつ</sup>を繰り返しながら連なる街。その合間、遠くに<sup>にじ</sup>滲む山の端。

「ちっばけなもんだろ？」

擦れた低い声で、彼は囁く。ここから見れば、オフィスのあつた<sup>かさ</sup>栄も、名駅の高層ビル群さえも、白く霞んで淡い影のようだ。

「――本当に」

なんで、三か月もよくよしていたんだろう。こんな広い世界の中、たまたま出会った一人の人とうまくいかなかっただけで、もう終わりでなんて思ったりして。

「ちっばけな、ものですね」

男性の言葉を繰り返した時、私はハッとした。目だけを動かして、私は彼を見る。――間違いない。

引き締まった口元。張り出した額に、くっきりと濃い眉。優しい黒い瞳。

三か月、毎日見てきたのだ。

「シャバーニ」

呟くと彼は、こちらを見て微笑んだ。



あ  
る  
の  
み  
弥  
矢

## 妖 怪

「ここ、見覚えがある」

母に連れられて、観光客でにぎわう古い街並みを歩いていたら、突然周りの景色が昔の記憶と重なった。

今よりも小さな歩幅。前に伸びる小さい影の隣に大きい影。私の手をつなぐ誰かの手。両親や保育士さんとは違う、間延びしたりリズムの声。言葉が文章で話せるようになったくらいの子どもの私には、何と話しかけられているのか分かるようで分からない。周りの建物も自分が住んでいるところに比べて、何か違う。黒と白の壁。木でできた格子<sup>こうし</sup>の窓。ピカピカに光る屋根の瓦。古いような新しいような、その不思議な世界を、幼い私は怖がりもせず、むしろ見とれて歩いていた。「そういえば、小さいころに一回来たわねえ。ひいおばあちゃんに連れられて」

そうか、あれはひいおばあちゃんだったのか。後で、たくさん長生きすると物も動物も人も妖怪になるという絵本を読んだとき、あれは妖怪で、私は異世界に連れてかれたんだと興奮してたけど、風景は江戸時代の街並みを残す保存地区、言葉もこの地方の方言だったから分からなかったんだ。

「ほら、着いたわよ」

通りを抜けてしばらく行くと、私と母は一軒の家に入った。中には親戚と思われる人たちが集まっていた。座卓で話をしたり、隣の台所でお茶や料理を準備していたり忙しそうだ。

もう一つ奥の和室に、女性が横たわっていた。母が伯母と話を始めたので、私は大人たちに気づかれぬよう、奥の和室に忍び入り、顔を覗きこんだ。瞬間、通りでよみがえった記憶の手の先に体がつながり、顔まではっきりと現れた。

この人が、あのときの妖怪、もとい、ひいおばあちゃんだ。

私が傍ら<sup>かたわ</sup>に座ると、<sup>まぶた</sup>瞼が開いた。

「百歳、おめでとう。ひいおばあちゃん」

今日は百寿のお祝いだ。でも妖怪になるには百年じゃ足りないかもしれない。だって、あの街は二百年以上経っても生き生きとしてるんだから。





わたりゆか  
人生大逆転ボート

あれ、綺麗になってるね。  
10年ぶりに訪れたボートハウスは、リニューアルされて空調の効いた待合室までできていた。暑い中、アップダウンのある園内を歩いてきたせいかわは首筋に汗をかいている。

「めーちゃんパンダ乗りたい」  
娘は、さっき実物を見てきたコアラのボートには目もくれず、実際には飼育されていないパンダのボートにロックオンされている。

ここに来るのは、三度目だね。覚えてる？  
と聞かされると、妻は少し考えるような顔をして「そうだね」と言った。

一度目のその日、家を出るとき、じいちゃんに女の子と東山でデートだと告げるとボートには乗るなよと念を押された。別れるも何もまだ付き合っておらず、園内を歩いていても、その子は笑わず全然楽しそうじゃなかった。一か八かの勝負に出るなら逆に乗ってみるかボートに誘った。

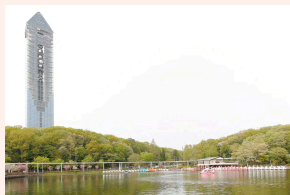
ボートの中で、大学の合格発表の日の話をした。じいちゃんに、父さんが合格発表の日に東山のボートに乗ったせいで落ちたから乗らないように、と言われたこと。センター失敗していたこともあり、やけくそ半分で乗ったら合格していたこと。そんな話をすると、不意に彼女から笑い声が漏もれた。

二度目に訪れたときは遠距離恋愛中だった。互いに仕事が忙しく、彼女から別れを切り出されるのではと感じていた頃だ。「僕たちは別れません」と書かれたピンクの手漕ぎボートに乗ろうとしたら、恥ずかしいからと同乗を拒否され、一人で池を一周した結果、あなたには呆れたと笑われた。

そして、今日。パンダのボートを漕ぎながら、妻の横顔を見ると笑顔ではあるが何だか心細そうだ。

俺だって自分がこの歳でガンになるなんて思ってもいなかったよ。

妻に声をかける。  
大丈夫。東山のボートは俺の人生逆転ボートだから。  
「人生逆転ボート？」娘が無邪気に聞き返す。  
「そうだよ。パパの人生大逆転ボート」  
妻が私に笑顔に向けた。



カ  
ト  
ー  
ト  
シ  
大  
学  
4  
年  
生

<sup>あきら</sup>  
就活も早々に諦め、時間を持って余っていた大学4年生の私。学校の行き帰りに動物園に寄るのが日課になっていた。その日も駅を出て動物園に向かっていると、突然50代くらいの女性に声をかけられた。聖書を差し出しながら微笑んでいる。「お嬢さん、何かお悩みありませんか？」

こういう場合はスルーが一般的かもしれないが、私はまあまあ暇だったし、高校時代から好きだった哲学を大学でも専攻していた。要するに面倒なやつだったのだ。ちょっと試してやろうという意地悪な気持ちもあったと思う。「私にはわからないことがあります」そう言うと女性は笑顔でうなず、「神は何でも知っていますよ」と全知の神について語り始めた。初対面なのに何故かイライラした。「じゃあ教えてください」女性の言葉を遮って私は尋ねた。「私は何者なのでしょうか？」女性は笑顔のままこう言った。

「神の声をお聞きなさい」  
なんだそりゃ。ここで時間を費やしたことを少し後悔し、女性の話が終わるのを待たずして動物園に向かった。門の前で振り返ると、女性は歩道の端で宙に向かって微笑んでいた。

北園の奥のベンチが私のいつもの場所だ。ここにいるといろんな声がある。動物の鳴き声や子どもたちの声。それらに混じって聞こえてくる、あの日の誰かの声。

「で、このエントリーシート、結局何が言いたいの？」  
「最近の子って皆そうだよね」  
「哲学なんか将来何の役に立つの？」

頭の中で再生される声をため息で払いのける。「神の声をお聞きなさい」さっきの女性の言葉をふと思い出し耳を澄ましたその時、遠くでフクロテナガザルが「あー」と鳴いた。その叫び声がおっさんみたいで、思わず笑ってしまった。空が明るかった。

ある人は神が人間を作ったと言い、ある人は猿が進化して人間になったと言う。神でも猿でもない大学4年生の私は、立ち上がり、大きく伸びをする。動物園には、いろんな動物がいる。



入  
選

穴  
フクギなをき

明け方まで降っていた雨も今は止み、外は夏らしいカラっとした良い天気になっていた。先日、同僚に教えて貰ったアレを見に行くのは、今日が最適かもしれない。最近仕事が忙しかったせいで、休日に外へ出かけるのは久しぶりで、妻は着ていく服を選ぶのに余念がない。

「で、どこへ連れて行ってくれるの？」

「昼は、覚王山あたりでカレーでもどう？」

「うん、うん」

カレーが好きな妻がニコニコと頷く。

「午後は東山動物園で、イケメンゴリラでも見て」

「うん、うん、うん」

動物が好きな妻の顔が綻ぶ。

「『ダム穴』を見る」

最後の言葉で、固まる妻。

「……何、それ？」

妻が怪訝そうな顔をして、こちらを見た。

「『ダム穴』知らんの？」

私はそういいながら、スマホで『ダム穴』検索した写真画像を妻に見せた。

「何!? キモチ悪いし、怖いんだけど!!」

妻が身を引く。

「キモカッコイイと言ってほしいね。ダムの水が一定の水位まであがると、そこから水が溢れて流れる穴だよ。これは外国のもので、この構造のダム穴は日本には無いらしいけどね」

「どういう事よ。海外へ行くの？」

「行く訳ないだろ。あるんだよ『ダム穴』が名古屋にも。驚きだろ」

——名古屋にも『ダム穴』があるの知ってる？ 猫ヶ洞池ダム穴。

——自由が丘のあたりだよ。

「水位が下がりすぎても単なる穴だろうし、雨がドシャ降りの中行くのもどうかと思ってたし、今日なんか好都合だと思うんだけど」

妻が顔をしかめて俺を見た。

「……何がいいの？ そんなの？」

「暗く深い穴にロマンを感じるね。ドイツの哲学者も言っていただろう『深淵を覗く時、私もまた、深淵に覗かれていたのだ』と」

「知らない！ 勝手に行け！」

妻は持っていた服を私に投げつけると、寝室へと入っていった。どうやら機嫌を損ねてしまったようだ。仕方がないから、深淵を覗くのは、今度また独りで行く事にしよう。



入  
選

あれ？ なんだっけ？  
あの動物園にあるタワー。  
名城武尚

名古屋市民に聞きました。名古屋にある高い建物はなんでしょう？ という質問の答えで上位を占めるのは、やはり名駅にそびえたつツインタワーや栄の夜景を一望できるテレビ塔であろう。また昨今では、グルグルと捻じれた独特の建物も注目を集めている。そんな中、奇抜さと高さを兼ね備えているのに、名前もろくに覚えてもらっていない建物がある。それは何か。東山スカイツリーだ。

奇抜？ 高い？ と疑問の嵐が吹き荒れそうだが、冷静になって欲しい。あのトッキントッキンで、通称鉛筆タワーと呼ばれるその風貌は、子供を虜にする事間違いない。見慣れ過ぎて気づいていないだけ。

これで奇抜さはクリアとして、次は高さにいこう。建物自体は134mとやや低いと感じる人もいるだろう。なにせ名古屋には200m越えの建造物は3つもあるのだ。やっぱり高いとは言い難いじゃないか。と思った人は、ここがどこにあるのか忘れてはいないか。そう東山である。確かに建物自体の高さはそこまでではないが、標高は214mもあるのだ。結果として4つ目のオーバー200。という事になる。

今度は言葉の計算だ。日本一人気のタワーと言えばスカイツリーだ。その前は東京タワーということになるのだが、これを足すと、どうなるか。スカイツリー+東京タワー=スカイツリー。どうだ、参ったかと私は言いたい。

関西方面でいうとやはり通天閣であろう。ただ、もっぱら登るのは観光客で地元の人には登らないと有名だ。スカイツリーはもっとすごい。観光客すら登らない。

旅行ガイドブックを開くと名古屋城に並んで、動物園が書いてある。主役はシャバーニ。それは仕方ない。そもそもここは動物園。次に池が紹介されている。単なる池だ。ボートをカップルで漕ぐと別れるという伝説があり、恋試しで乗るそうだ。タワーの記載は皆無。

ということで、確認のために再度聞いてみようと思う。

名古屋にある高い建物はなんでしょう？



おんたけさん

「あれ、何年か前に上ったよね。御岳山が噴火した話をした気がするから五年くらい前かな」

閉園三十分前、歩き疲れた私たちは池のほりにあるベンチに座った。視界の端に立つスカイタワーは、今日も静かに山手の街を見下ろしている。

五月の平日、穏やかな日差しと時折吹き抜ける優しい風。動物園デートの終盤。よく出来た少女漫画のような光景。きっとこの場でどちらかが愛の告白をする展開なのだろうが、私たちには交際を始めてもう六年近くの時が経っている。ドキドキヤスリルを求める時期は終わり、ひたすら安定した日々が愛おしい。

「よう覚えとるね、眠かった記憶しかないわ」

隣で大きなあくびをした彼につられて私の口も勝手に開き、涙腺がゆるむ。

「あのボートも乗ったけど、全然別れる気配ないよね」

いつからか名古屋市民に失恋の象徴として伝承されている噂のボートが、若いカップルを乗せてゆっくりと池を横断していく。

「ボートに乗っても乗らんでも別れるやつは別れる、別れんやつは別れん」

彼の横顔はほんのり得意気だ。そういうところが好きだよ、と言いかけてぐっ飲み込む。

二人で東山動物園に来たのは五回目になる。幼少期から何度も訪れたこの場所に、一番好きな人と一緒にいられることが未だに不思議で仕方がない。

「台湾ラーメン食いたくなってきたな」

お昼に食べたお弁当がまだ残っている感じがしていたのに、彼の声を聞いて急にお腹が空いてきた。

「台湾ラーメンいいね、帰り食べに行こっか」

彼に出会うまでは辛いものなんて全然食べられなかった。台湾ラーメンなんて絶対無理、そう思っていた。今では定期的に食べたくなる。

「よっしゃ行くかあ」

歩き始めた彼に早足で追いつき、左手を握って歩き出した。体温が心地よい。死ぬまでこの人とどうでもいい話を重ねていきたいと思う。

水色だった空が色づき、彼の横顔もほんのり赤く染まった。

## 入選

有倉朋  
どうでもいい話

誰に聞いたんだろう。「このボートに乗ったら、別れることになるよ」と。

6年前の3月、この街に移ってきたのは、私の転職が理由だった。終業式が終わってすぐ、引っ越しの車に乗せられた息子は、春休み中ずっとふてくされていた。何度も寄せ書きを取り出しては、涙目で「帰りたい」とこぼす息子に「仕方ないやん」と言いながら、どうしたものかと頭を抱えていた。

春休み最後の休日、私は息子を動物園に連れ出した。息子のご機嫌を取りたかったからだ。しかし「ゴリラもゾウも、ぜんぜん珍しくないわ」と、返ってくるのは愛想のない言葉ばかり。ペンギンもライオンも駄目だった。への字に曲げた口を固く結んだまま、伏し目がちに息子は園内を歩き続けた。

そんな息子の目が、池に浮かぶボートを見た瞬間、キラリと光った。「あれに乗ろう!」と走り出し、列に並ぶと、「俺の力を見せてやる」とニヤリと笑ったのだ。

しかし、親子3人を乗せたボートは、予想以上に重かったようだ。係員に急かされ、オールを動かすが、その手はおぼつかない。進行方向も定まらない。「焦らんでええから。こうやって押して、引いて、押して、引いて……」

動き出したボートは、その重さを忘れたように、息子の意のままに進み始めた。「な、俺漕げるねん」息を切らしつつ誇らしげに、息子は今一度ニヤリと笑った。

その日から、息子は泣きごとを言わなくなった。新しい小学校生活は順調だった。親友と呼び合う友達もでき、いつしか息子は名古屋の子になっていた。かつて使っていた言葉を、彼はもう話せない。「そんなん忘れたもんで、出てこんわ」と言い放つ息子に、嬉しいような寂しいような、複雑な思いをした日が懐かしい。

息子はもう、この家にはいない。高校生になった彼はこの家を出て、さらに東へと旅立って行ってしまった。あのニヤリとした笑顔で、「卒業したら、俺、名古屋に戻るから」と言い残して。

## 入選

加瀬響子  
旅立ちのボート





## 入選

### 空色奏 不器用な友人

先日、僕は彼女に振られた。きっかけは喧嘩だった。立ち直れずにいる僕を気遣ってなのか友人が東山動物園に誘ってきた。あまり気乗りはしなかったが友人の気遣いを無駄にもできず行くことにした。動物は嫌いじゃなかった。動物を見て回るうちに心も少しずつ落ち着いてきた。ぬいぐるみや家族へのお土産も買い動物園自体には満足していた。しかしまだ心の底では彼女のことが忘れられずにいた。「最後にボートでも行こうぜ」と誘ってきた。別に断る理由もないので行くことにした。

池は思ったより人が多くにぎわっていた。

「ここにまつわる都市伝説って知ってる？」友人が聞いてきた。

「いや、知らないけど」

「このボートと一緒に乗ったカップルは別れるらしい」

「なんで今誘ったんだよ」

意味が分からなかった。別の機会に誘えばよかつただろと思った。「こういうのって実際は乗ったから別れるんじゃないかってこういった迷信を真に受けて嫌な気持ちになって別れるんじゃないかと思うんだ」友人は真剣な顔をして続ける。

「要は気持ちの持ちよう。暗いままじゃいいことなんて起きやしない。でも気持ちを切り替えて明るく過ごせばいつかチャンスを掴めるかもしれない。そう言いたかっただけさ」

おそらく東山動物園に誘ったのは最初からここに来るために誘ったのだろう。立ち直れずにいた僕を元気づけようと計画を立てたのだろう。それがこの場所とセリフだと考えたらこの友人の不器用さに思わず笑いが込み上げてきた。



## 入選

### くろくなつたしろいくま。 マタアシタ

バスの窓から見える景色が少し変わった。しかし、忘れかけた記憶が蘇る。景色の一部が脳裏に流れればまるで無くしたパズルのピースが見つかったかのように懐かしい日々が走馬灯のように流れていく。

『マタアシタ』、そう話す日はいかに短期間だったのか。子どもだった私は『マタアシタ』の言葉の意味を深く考えることはなかった。今になって『マタアシタ』は永遠に続くものではなく限られた期間内において繰り返されるがために、鬱陶しさを覚えたのだ、と思う。卒業の日、『マタアシタ』は、『また会おう』<sup>うっとう</sup>に変わった。世の中から認められなくて自分の思い描く希望を胸に小さな社会から羽ばたいた日はいつの日か目紛しく進む日々のために脳の片隅に忘れられていたようだ。

バスが止まった。どうやらバス停に着いたようだ。いつも通り人が乗り込んでくる。その中に見覚えのある姿が。彼女は私に気づいて手を振ってくる。

あの日の『また会おう』は今、ここで叶えられた。

懐かしい思い出話に花が咲きそうだ。



入  
選

園生  
棠子  
高三女子の  
九月十六日

銀のステップをトントントン、マナカをピ。プシュケッと音がしてドアが閉まる。九月十六日、朝七時のバス。えっと、どこか席空いてるかな。あの、梨って書いてある箱を抱えたおじさんの前に座ろうと。あ、窓の外、お母さんとおじいちゃん、まだ心配そうに見てる。バス、もう発車するから、帰っていいよ、行ってまいります！ 鞆の中のお弁当、まだ温かい。

私は、普段は自転車通学だ。このカーブだって自転車でシャーッと、制服のスカートに風を受けて一気に駆けるのが日課だ。

今日は就職試験。このバスで名古屋駅まで出て、名鉄電車で四駅くらい。私は、女子には珍しく、精密機械の工場で技能を磨いて、技能五輪に出場するのが夢。モノづくり愛知を支えるような優秀な技能員になりたい。私のおじいちゃんは、愛知の名工と称されていた。私はおじいちゃんによく似て、手先が器用で視力よし。

このバス路線はやたらと橋って名前が付く停留所が続く。橋の上なんて通らないんだけど、すぐ右側の堀河に沿って名古屋の街を南から北へ。おお、前方に、名古屋ろんどん まつしげこうもんの倫敦、松重閘門が見えてきた。

バスの中は、眠そうなサラリーマン、保育園児を連れのお母さん、敬老バスをぶら下げた老夫婦、後ろの梨箱おじさん。あの立ってる学生服、私と同じ就職試験かな。

おっと急ブレーキ。わわわ、梨箱が傾いて、ごろごろ梨が転がる。私も皆も拾うよ梨を。運転手さんが謝ってる。梨箱おじさんは感謝しきり。

ふう。私も、就職したら毎日眠い目をこすってバスに乗って会社へ通うんだろうな。一年に一度は、梨が転がるようなこともあるのかな。そして、結婚したら子供を保育園に送ったり。敬老バス貰えるまで。どんな未来が私を待っているんだろう。

窓の向こう、名古屋のビルが朝陽に輝いている。



入  
選

き  
な  
こ  
ご  
は  
ん  
時  
間

「お帰りー」

花火を待つ人混みの中、斜め後ろから聞こえた声に、ドキッとした。「遅かったね、混んどった？」

娘に、香苗にとてもよく似た声。でも、香苗じゃない。あの子は今年の春、就職して東京に行ってしまった。

「うん、めっちゃ混んどったー」

男性の声と共に、ガサゴソとビニル袋を漁る音。

「はい、たこ焼き。マヨネーズ駄目だったよね？ 抜いてもらったけど」

「え、覚えてくれたの？」

女性の声が、嬉しそうに跳ね上がった。私は思わず、隣にいる夫を見る。ポロシャツの胸元を団扇うちわで扇ぎながら夜空を見上げるその姿は、ただのオジサンだ。いつものよれよれのTシャツを着ていないのは、そんなもの着ないでよと私が怒ったからで、彼の意志じゃない。そもそも、花火でも行こうかと言い出したのも、私だ。娘も巣立って、また夫婦二人になったんだし。そう思ったのに。

私はため息をついて、煌めく観覧車を見上げる。昔、香苗がまだ小さかった頃、三人で乗ったっけ。確かあの時、娘は――。

「ギャン泣きだったよなあ」

ぱつんと、夫が呟いた。きよんとする私に、夫は、ほら、と団扇を振ってみせる。

「昔、三人であの観覧車乗ったろ。そしたら、香苗が急に、怖いって泣き出したじゃん。なのにお前が抱いたら、すぐ落ち着いて」

あ――。

私は咳払いした。乱暴に首を振る。

「そんなすぐでも、なかったわよ。あんまり泣いて暴れるから、観覧車が止まったらどうしようって、ひやひやしてたもの」

「そうだっけ」

夫は団扇を動かしながら、観覧車を眺める。

気は、利かないけど。すっかり、オジサンになったけど。この人と私は、同じ時間を共有してきたんだ。

「そうよ」

多分――同じ、未来も。



## 入選

### 南月 見えた。

すっかり遅くなってしまった。  
子連れの外出はどうも予定通りにいかない。  
そんなことはわかっているはずなのに、何に時間を割いたかわからないうちに一日が終わっている。  
今日も三重方面にちょっとドライブ、のつもりだったのにいつの間にか辺りは真っ暗だった。  
夏のそれは冬より遅い。

いせわんがん めいこう  
伊勢湾岸自動車道を走り、名港中央インターチェンジに向かう。  
今夜は満月なのか、遠くの空にぽっかりと月が浮かぶ。  
うさぎさんが見えたと、後部座席で子どもたちがはしゃぐ。

大人にはうさぎさんが見えない。  
暗がりの中、ダッシュボードから手探りで飴の入った袋を探し、運転席の夫にひとつ渡す。  
そもそもダッシュボードの中の飴すらよく見えない私に月のうさぎさんなんて見えるはずがない。

名駅周辺の建物くらい目立てば、ほら、私でもうっすら見える。

「花火だ！」  
私の真後ろから声がした。  
どこかで花火大会でもあるのかと花火を探したが、見つからない。  
「花火、黄色、ピンク！」  
今度は運転席の後ろからだ。

後部座席の子どもたちの指差す方にはシートレインランドの観覧車。  
光のバリエーションを変え、花火みたいにきらきら輝く。

「そうだね、花火みたい」  
それはようやく私にも見えた。

シートレインランドの花火が名古屋の街に戻る私たちを迎えてくれたように思えた。



## 入選

### 梅澤奈々子 絞りの帽子

「この布で母の帽子を作って欲しいの。できるかしら？」  
親友のM子がバッグから取り出した3mほどの浴衣の布は、有松絞の技によって立体的に浮かび出た藍色の花模様、品よく布地に広がっていた。一目で高級な布だと分かった。  
「素敵なお布ね。失敗ないように頑張って作るね。ところで、お母さんの具合はどう？」  
「あまり良くないわ。一人で歩くことができなくなって退屈そうだし、物忘れも多くなってきたし」  
いつもは元気な彼女の気弱な発言に、事の深刻さが想像できた。  
その後、ランチを食べながら思いつく限り面白い話を持ち出してはみたものの、会話が盛り上がることはなく、彼女が帰らねばならない時間になった。  
「じゃあ、できたら電話するね」

3年前から私は趣味で帽子を作っている。数日前M子から、お母さんがもう着ることができなくなったお気に入りの浴衣を帽子に作り替えて欲しいという電話があった。話を聞いた時、引き受けるかどうか迷った。一旦浴衣にはさみを入れたら、もう元には戻せない。上手く作れなかったらどうしようと不安が頭によぎったが、断ることに抵抗を感じた。

翌日からさっそく仕事に取り掛かった。布からは職人の丁寧な手仕事への誇りとこだわりが伝わってきた。その端くれに奇妙にも関わることになり、私は少し興奮した。有松絞の素晴らしさを台無しにはいけないという緊張感。帽子と言う狭い空間に閉じ込めてしまう罪悪感を感じた。私は長い時間、布とにらめっこをし、慎重に布を帽子の部分別にカットした。心を込めて縫うことでよい帽子が完成することを願った。

電話をして帽子を郵送してからしばらくして、M子からお礼の手紙と写真が届けられた。  
「母とこの前近所の夏祭りに行ってきた。……」  
写真の中の帽子を被ったお母さんは右手でピースを作り、笑顔で車椅子に乗っていた。  
M子もきっとそばで笑っているに違いない。



入  
選

ま  
k  
o  
六  
月  
第  
一  
土  
曜  
の  
前  
日



東海道を真っ直ぐ進み、駅前へ向かう。  
まつりの準備をする商店街の人達が見える。  
大人だから浮かれているのを我慢しているけど、ワクワクが溢れて  
隠しきれていないよ。  
毎年おばあちゃんと行く有松絞りまつり。  
明日のお目当てはハンカチの絞り体験。たませんも食べたいし、  
山車も見たいなあ。  
そんなことを考えながら私は両手をぐうにしてぐんぐん進む。  
ねえ、日本遺産に認定されたんだよ？  
私が今悠々と歩いている道も、週末は全国からたくさんの人が押し  
寄せるんだよ？  
それなのに有松の町並みはいつもと変わらない。  
「まほちゃん！」  
名前を呼ばれ振り返ると、肩出しの服を着た麗華ちゃんちようちようが蝶々まとみた  
いにひらひらと手を振っている。陽のオーラを纏まといながら。  
「まほちゃん、どこ行くの？」  
「えーっと……本屋」  
「私も本屋。偶然だね、何買うの？」  
麗華ちゃんのくるんと上を向いた睫毛まつげ越しには、絞りのシャツが  
並んでいる。  
決して威張らず、堂々としている濃紺のシャツは、振り子のように  
揺れる私の背中をそっと押した。  
「週刊少年ジャンプ……って知らないよね」  
「お兄ちゃんが買ってるから知ってるよ。時々読ませてもらうけど、  
面白いよね！」  
「麗華ちゃんは何買うの？ ファッション雑誌とか？」  
「それってすごい偏見だよ。雑誌もたまに買うけどお」  
キラキラ女子（私が心の中で勝手にそう呼んでいる）は気取って  
なんかななくて、小説買うの。そう続けると豪快に笑った。  
放課には、麗華ちゃんの机の周りに女子達が群がる。  
輪の中心にある笑顔を斜に構えて見ていたけど、ずっと話してみた  
かったんだ。  
「まつり、楽しみだね」  
私がそう言うと、麗華ちゃんうなずは小動物みたいに何度も頷く。  
ひとしきり笑った後、麗華ちゃんがふう。と息を吐いて  
「日曜、もしよかったらまつり行かない？」  
と言った。  
ふたつの笑い声が反響すると、寄り添うように見慣れた町並みが  
広がっていく。

入  
選

内  
田  
百  
合  
香  
ア  
ン  
ビ  
バ  
レ  
ン  
ト  
・  
ナ  
ゴ  
ヤ



目の前を歩く少女が背負うウサギのぬいぐるみ型リュックが、  
どうしても首を吊っているようにしか見えない。その少女の友達  
は同じようにパンダを吊り下げている。  
私が少女の時にはこの街にもたくさんいたロリータとゴシック  
ロリータたちから派生したであろう、“ゆめかわいい”と“やみかわいい”  
彼女たちは、何の悪気もなく動物を吊り下げている。  
さながら集団自殺の光景を、彼女らと同じ年の頃の私だったら  
素直にかわいいと思うのだろうか。当たり前すぎて何も思わないの  
だろうか。今となっては彼女たちのようなファッションを未だに“ゆめ  
かわいい”だとか“やみかわいい”と呼称するのかすら自信がない。  
ファストファッションに身を包んだ自分をショーウィンドウに  
映す。上手く社会に擬態ぎたいしているな、と、いつもは思わないことを  
思った。かつては耳を縁取っていたピアスホールもふさがりかけて  
いるし、誰にも見られないよう巧妙こうみょうに場所を選んで入れたタトゥー  
も本当に誰にも見られることはなくなったし、清水の舞台から飛び  
降りる気持ちで買ったヴィヴィアン・ウエストウッドのアーマリング  
は家の片隅すずで燻すすけている。  
彼女たちはタピオカ屋を見つけると手をつないで厚底を鳴らして  
走り、列に並んだ。背中で揺れる動物たちは終始俯うつむいたままだった。  
列の横を通り過ぎる時、彼女たちは私にとって聞き慣れない関西系  
の方言で話していた。  
たかが大学4年間のみを東京で生活した奴らの言う、「名古屋って  
何にもなくてつまんないよ」が、大嫌いだった。それに言い返せな  
かった自分も大嫌いだった。  
誰かにとつては何でもなくても、誰かにとつては大いに意味のある  
場所。彼女たちもあと何年かしたら、ファストファッションに身を包ん  
だり上京したりするのだろうか。  
視線を感じて振り返ると、少女たちの背中でぶら下がっていたウサギ  
とパンダと目があった。私たちは小さく微笑み、目配せをした。

## 入選

### ちやーこ はじまりの計

「今夜のテレビ塔はシンミリしとらん？」

母は足を止め寂しそうに呟いた。

母は今日定年退職し、私達は祝いの宴を終え夜景を見ながらそぞろ歩いていたのだ。

「名古屋テレビ塔は私より年上で、確か日本初の集約電波塔なのよ。とうにその役割は終えているけどね」母は弱く続けた。

私は見上げながら「テレビ塔は名古屋の中心に在るものだがね。電飾デザインは変わるから楽しみだよ。母さんは何時も私の手を引っ張りずんずん歩いていたからなあ。私が指差して綺麗ねと言ってもあんまり聞いてなかったでしょ」

勝手にしみりしている母の様子に次の句が続かず、つっけんどんな物言いになってしまった。どうも母との会話は居心地が悪いのだ。話らしい話が續いていかない。

ややあって母は私の顔を覗き込むようにして話し始めた。「そうね、毎日が走馬灯の様でした。あなたにも十分な事は出来なくてすまなかったわね」

母のことばとは思えず、私も思わず母の顔を覗き込んだ。こんな柔和な顔の母を私は知らない。

母の口癖は「まだ回しとらんの、早よしなかんわ」

さあ、さあ！と言うように背中に圧を感じ続けてきた。

年相応の笑い皺しわの優しい表情に驚きながら母を思い出してみた。自分をも追い込んで精一杯の姿が浮かんだ。

今、大きな荷を一つ下ろした母に何を言えば相応しいのだろう。

テレビ塔をもう一度見上げた。

暫くして自然に私の唇は動き出した。

「大丈夫だよ。ちゃんと世話をして大切に育ててくれたよ。お母さんが働いている姿を私はちゃんと覚えているよ。明日からは第二の人生だね。お母さんのための人生だよ」心からのことばが出ていた。

母は「私のための人生？何をしようかな」眩まぶしそうな笑顔で私と腕を組むと力強く一歩を踏み出した。

私も心の中で自分に言うてみた。「私のための人生だ」そして大きく息を吸い込んだ。

## 入選

### 福耳劇場 名古屋愛に目覚めた日

名古屋ってさ、車の運転が荒いよね。

横断歩道で歩行者がいるのに車が迫ってくるしさ。そうそう、車に乗っていても車間距離を詰めてくるし。

あっそれと自転車ね。何で右側を走っているの？ホント危ないだろ！と、出張でやってきた生まれも育ちも就職先も東京の友人は、再会するなり栄のド真ん中で開口一番まくしたてた。

久しぶりに会っていきなりそれか？私は閉口してしまった。

でもさ……と、少し言い返そうとしたら、

「あっ、オマエ、それは三河だ、尾張だなんて言って、名古屋じゃないとか思っているんじゃないの？」と言いつつ。

ぐっ、凶星だ。こいつは昔から歯に衣着せぬ発言ばかりで腹が立つ。だけど、それらは本音だから、ある意味清々すがすがしい。が、そろそろお互い大人になったので慮ろうよ。

「でさ、今夜はどこ連れて行ってくれるの？あえて名古屋メシはいいよ！東京でも食えるから」と言いつつ、絶句している私に言葉を重ねた。「あれ？凶星だった？」

ぐぐっ、それも凶星だ。私は長く住んでおきながら名古屋が嫌いだった。今コイツが言った事もそうだし、遠方から他の友人が来ても案内するのは市外だし、へたすりゃ県外だ。なんなの名古屋！と思う事はしょっちゅうで。

しかしだ！それは住んでいるから言えるのであって、住んでいない者が名古屋の悪口を言うんじゃない！と、激しい怒りを覚えた。

そして、その時はっきり気づいたのだ。

そうか、この感情は愛だ！私はいつしか名古屋を愛していたのだ。引っ越さない理由もある。彼女は名古屋の人だし。

私は急に晴れやかな気持ちになり友人に言う。

「あのテレビ塔の近くに美味しい店があるんだ」

夜はまだまだ長い。今まで心に封じ込めていた名古屋の良い所いっぱい語ってやるよ。実は多めに語れるんだ！そうだ二軒目は円頓寺へ行こう。明日の朝はモーニングをお見舞いしてやるぜ！

まずは鬼ころしで乾杯だ。ま、これも名古屋では……。



「あのダチョウの卵みたいなのはなんだ？アートか？」  
とのたまった瞬間チキンを落とした夫の食べ方が昔っから気に入らない。  
「はあ、食べるか喋るかどっちかにして」  
いや、もうそんなことはどうでもいい。  
それより一人娘がちっとも片付かんのかわ！

うちの娘、名古屋嬢。覚えてみえる？巻き髪の。コンサバの。  
あの頃はウチも羽振りがよろしくてね、娘とよく栄のデパートに出かけましたの。  
姉妹に間違われたりして、フフ、雑誌に載ったこともありましてよ。  
それが……

それが今じゃファストファッション。たまの外出はファミレス。  
正直私はどっちも大の苦手。  
申し訳ないけど、一度肥えた目と舌はゆーこと聞かんのかわ。  
今日は無理してフレンチ。私の奢り。名古屋の街がよう見えるでしょう。  
明日からまた時給960円のパートで猛烈に働くでいいんだわ。  
落とさんといてよ、チキン！

私、娘の同級生とも仲良しでしたの。  
カフェやらブティックやらよくご一緒したわ。  
お友達みたいだと言ってくださってね、恋の悩みも随分お聞きしましてよ。  
皆さん大学出たらすんなり家庭に入られて、  
娘は地元の大手企業に就職して、ちゃんとした家柄の方とお付き合いして、  
ああ、それなのに……

それなのに、この夫。  
何を思ったか早期退職事業失敗あれよあれよと下り坂。  
「名々子すごいな。あいつの会社はあの辺か？」  
「ナイフで指さんといて。あの子はね、女社長ってタイプじゃないの。  
私に頼らなきゃ何にもできん子なの」  
「いつの話しとるんだ」  
「今よ、今。このままだったら、あの子確実にお一人様だわ。  
一人暮らしをさせたのがいかんかったんだわ。こんな近くに親がおるのに」  
「偉大なる田舎だな」  
「何、それ？」  
ショコラティエが小洒落た皿を夫の前に置いた。  
「おっ、チョコレートのシミがアートだねえ」  
勘弁してよ。もういいわ。頼むで綺麗に食べてよ！



## コトノハなごや写真展（フィールドワークは荒天により中止）

9月：今年度写真提供の宮田雄平さんに監修いただき、「コトノハなごや」の課題写真と「有松」の写真を、伏見・MITTS COFFEE STANDにて展示しました。街なかでの写真による「コトノハなごや」のPRは初めてで、オフィス街で働く方々のランチタイムやコーヒーブレイクに見ていただきました。



## ワークショップ

9月：講師は作家の太田忠司さん。「星新一ショートショートコンテスト」で優秀作に選ばれ、圧倒的な刊行数を誇る太田さんの講義は、アイデアの見つけ方などとても分かりやすく、参加者の方々も納得のご様子。先生の共著である参考書籍を持参くださる方もいらっしゃいました。



## 一次選考

10月：愛知淑徳大学学生有志の方々を実施していただきました。講義時間外にチームごとに都合をつけ、選考。皆さん「応募者の方々の熱意が作品から感じ取られ、選考にも熱が入った」とのことでした。



## パネル企画展

昨年度の中村航さんの作基調文と、2018年度入賞作をパネル化し、ナディアパーク7階文化情報ひろばで展示しました。



## 最終選考会

11月：選考委員の皆様の名古屋にお集まりいただき、入賞5作品を決定。候補に挙がっている作品を1作ずつ丁寧に読み込まれ、良い点・惜しい点を挙げられていました。



## コトノハなごやサロン

12月：当日まで公表していなかった入賞5作品をプロジェクターで発表。その都度会場内は緊張と静かな歓喜が漂いました。その後、実行委員会委員長による授賞式、選考委員の皆様による講評と、入選作品応募者の皆様とのトーク。写真提供の宮田さん、ワークショップ講師の太田さんにもご出席いただきました。



## 開催概要

**事業名称** 文芸による名古屋の魅力発信事業 『コトノハなごや』  
**開催期間** 2019年(令和元年)6月25日(火)～12月7日(土)  
**事業趣旨** なごやの魅力を深掘りする機会をつくり、文芸分野、なごやへの愛着を、メディアツールを活用して普及・振興していく。

**事業概要** 体験参加プログラム(フィールドワークとワークショップ)と作品募集プログラム(公式サイト利用応募を推奨の作品公募実施)、授賞式と審査員トーク(コトノハなごやサロン)、広報普及活動

- |        |   |
|--------|---|
| 5月     | 実行委員会発足   |
| 6月     | 公式ウェブサイト公開、参加申込・作品応募受付開始  |
| 7月     | フィールドワーク開催(有松) ※荒天により中止   |
| 9月     | ワークショップ開催(ナディアパーク7階第1スタジオ)、<br>作品応募〆切<br>伏見地区にて写真展開催(MITTS COFFEE STAND)<br>※フィールドワーク中止に伴う振替企画展 |
| ～10月下旬 | 一次選考にて入選20作品の選出、最終選考開始  |
| 11月中旬  | 入選20作品を公式ウェブサイトで発表  |
| 11月下旬  | 最終選考会、入賞作品決定  |
| 12月    | コトノハなごやサロン(ナディアパーク7階 7th cafe)<br>授賞式、公開講評トーク、企画展を実施<br>公式ウェブサイト、名古屋市サイトにて入賞5作品を発表              |

## 募集要項

「日常のなごや」の課題写真5枚の中から、写真1枚を選んで、連想する文芸作品(掌編小説等)「なごやとわたしの物語」を募集。

- 名古屋市内に在住、在勤、在学の方。
- 自作未発表であり(応募時点で著作権などの全ての権利が応募者に帰属するもの)、日本語の作品。
- 200字以上800字以内のテキストで一人2作品まで応募可。ただし同じ写真で複数の応募は不可。また合作・共作での応募は不可。
- 公式ウェブサイトからの応募を推奨。郵送受付も可。

## 賞

コトノハなごや 金賞 1作品 賞状と副賞10万円  
 コトノハなごや 銀賞 2作品 賞状と副賞各3万円  
 コトノハなごや 佳作 2作品 賞状と紀伊國屋書店ギフトカード各5千円分(提供:紀伊國屋書店プライムツリー赤池店)

## メディア掲載



Yahoo!Japan  
2019.07.10



名駅経済新聞  
2019.07.10



公募ガイドオンライン  
2019.06.26～09.18まで



登竜門  
2019.06.26～09.18まで

docomoニュース 2019.07.10  
 goo 2019.07.10  
 中日新聞ウェブ 2019.07.17  
 中日進学ナビ 2019.07.17

ウォーカープラス 2019.07.10  
 「名古屋市だより」(CBCラジオ) 2019.07.22,24,25  
 他広報なごや、FMラジオプログラム中にてピックアップ



## 広報普及活動

- 2019.06.17~06.24 YouTube公式ページにて開催告知編動画配信
- 2019.06.25 公式サイト公開（公式SNSは昨年より継続）  
（Facebook、Twitter、Instagram ※ほぼ毎日更新）
- 2019.06.25~12.13 パネル企画展（文化情報ひろば）
- 2019.07.05 瑞穂文化小劇場映画会にて朗読と作品募集の案内のビデオ上映（2回）
- 2019.07.10 港文化小劇場映画会にて朗読と作品募集の案内のビデオ上映
- 2019.08.20 南文化小劇場映画会にて朗読と作品募集の案内のビデオ上映
- 2019.09.17~09.29 写真企画展（伏見・MITTS COFFEE STAND）

- 東山総合公園ボートハウスにて課題写真展示（ポスターサイズ）
- 市内書店にて郵送済のプログラムパンフレット説明を随時実施
- オリジナルブックカバーを協力書店様にて配布
- 名古屋書店員組合様会合にて事業PR
- 各書店様実施の作家によるトークイベント等に参加し公式SNSにて掲載
- 名古屋を活動拠点とする作家の方、在名企業、審査員の方々によるSNSでの相互フォロー、リツイート

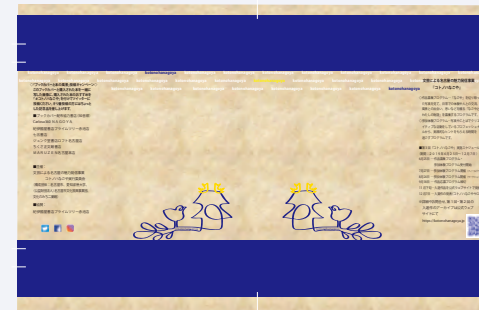


## 制作物



パンフレット [A3カラー 2つ折り]

公式ウェブサイト

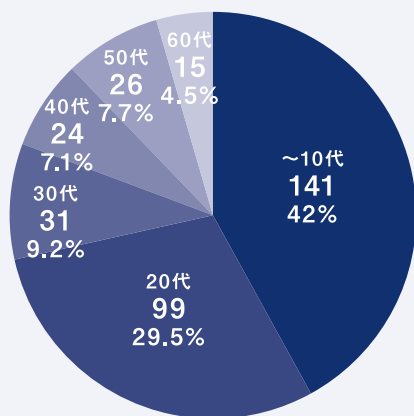


オリジナルブックカバー

- パンフレット（A3判カラー2つ折り）
- 公式ウェブサイト
- I2/7サロン用チラシ（A4カラー）
- オリジナルブックカバー  
（文庫サイズ×1000枚）
- 企画展パネル（A1×6枚）
- 写真展用パネル（A3×10枚）
- 動画（YouTube/開催予告編）

## 総参加数及び年齢構成等

応募総数 / 336作品



### サイト参照デバイス

- ユーザー数 / 3,304  
<期間2019.6.25-12.10>
- 総ページビュー数 / 12,235ビュー
  - ① mobile / 1,868 ユーザー
  - ② desktop / 1,278 ユーザー
  - ③ tablet / 137 ユーザー

### 過去の参考データ

- 応募総数 / 353件(2018年度:課題写真10枚)、165件(2017年度:課題写真5枚)
- ユーザー数 / 3,336(2018年度)、2,416(2017年度)
- ビュー数 / 12,018ビュー(2018年度)、9,169ビュー(2017年度)

### 応募者住所内訳

地域	件
名古屋市	162
愛知県内(名古屋市外)	109
愛知県外	65

### 応募方法内訳

方法	件	%
投稿フォーム(ウェブ)	329	97.9
郵送	7	2.1

### 選択写真内訳

番号・タイトル	件	%
1 東山総合公園	50	14.9
2 名古屋市交通局バス	115	34.2
3 名古屋港シートレインランド	74	22.0
4 有松の街なみ	35	10.4
5 オアシス21と名古屋テレビ塔	62	18.5

### 主催

文芸による名古屋の魅力発信事業実行委員会

[構成団体:名古屋市、公益財団法人名古屋市文化振興事業団、愛知淑徳大学、文化のみち二葉館]

### 協賛

紀伊國屋書店プライムツリー赤池店

### 協力

Carlova360 NAGOYA

紀伊國屋書店プライムツリー赤池店  
紀伊國屋書店mozoワンダーシティ店  
七五書店

ジュンク堂書店名古屋店

ジュンク堂書店名古屋栄店

ジュンク堂書店ロフト名古屋店(2020.2.29にて閉店)

ちくさ正文館書店

東山総合公園

東山ポートハウス

MARUZEN名古屋本店

MITTS COFFEE STAND

(50音順)

### デザイン

青木奈美(COUPGUT)

### ウェブデザイン

石垣嘉洋

文芸による名古屋の魅力発信事業実行委員会 <コトノハなごや実行委員会>

460-0008 名古屋市中区栄3-18-1 ナディアパーク8階 公益財団法人名古屋市文化振興事業団内

TEL 052-249-9385 FAX 052-249-9386 <https://kotonohanagoya.jp>

